大阪商業大学高等学校
校　長　小守　良昌

令和４年度　大阪商業大学高等学校　学校評価

１．めざす学校像

□目指す学校・基本領域

[1] 建学の理念に基づく学校づくり

(1) 建学の理念「世に役立つ人物の養成」の本校における今日的意義を探り、アイデンティティーを確立し、普遍的価値を持つ学校目標を定めた「スクールポリシー」の下、教育活動を推進していく。
(2) 学校目標「スクールポリシー」に沿い、教育方針を策定し、生徒、保護者、地域へ周知し、浸透を図る。
特に年度当初に明確に提示し、学校評価と連動させる。

[2] コースの充実

コースのコンセプト及びコース目標を基に、各コース委員会を中心に、年次進行で進んでいく学習指導要領に沿いながら、教育活動を具体化し推進する。これをアドミッションポリシーとして広報する。また、2023 年度から実施予定のコース別修学旅行に向けて、内容等を検討、確定していく。

(1) グローバル商大コースでは、３年目となったリメディアル教育を含む低学力者への対応、また、進路意識が高い生徒への進学対策「まな部」を継続するとともに、検証を行い、より良いプログラムとすることに取り組む。さらに、これら生徒が自主的に学習する環境整備として自習室の運用を検討する。また、国際社会の一員としての視点を育むことができるような取り組みとして、将来的な語学研修や選択制での海外修学旅行を含めて検討する。
(2) 文理進学コースでは、結果を出している 2018 年度改訂したカリキュラムで学ぶ２，３年生、これを継承した形での新学習指導要領一期生である１年生ともに、放課後授業、学期末授業、二次試験対策の補習などを通して、学力向上・進路目標達成を図る。学習量・学習時間増加を柱とする指導について検証を行い、一期生で実践した自学自習の習慣の育成、さらに内発的動機付けの醸成という観点から、ＯＦＩＸプログラムなどのイベントなどの効果等を検証し、積極的に導入していく。これは退学率の低下策としても有効であると考えられる。教科担当者会議を定期的に開催し、常に到達度を意識する。また、読解力養成について、読書課題やリーディングスキルテストなど新たな方策を考える。
(3) デザイン美術コースは、国公立大学合格を視野に入れたグローバル商大コースと協働した進路対策“まな部”を継続して実施する。デッサン力の育成という基本的な方針に沿って、2020 年度から実施している放課後授業については、十分な効果が認められるため、さらに効果的な運営を目指す。また、これら専願受験希望者増に繋がる施策として広報活動を行う。神戸芸術工科大学との連携授業については、大学と協議の上、コロナ以前の形式での実施を目指す。
(4) スポーツ専修コースは、引き続き 3 クラス体制とする。コース生としての意識を高め、プライドを持つ指導を強化する。また、しっかりと学習に取り組む姿勢を大切にする。剣道部での女子勧誘を本格化させ、コースの女子生徒増を図る。新学習指導要領実施を契機に改訂したスポーツ演習、総合的な探求の学習について、しっかりと企画し実施する。同時に、新たに開始する「簿記」での、授業や検定対策について準備していく。また、社会的に問題となっているクラブの活動時間の問題や指導者の勤務等への対応を考え、実施する。

２．中間的目標

□学習指導構想

[1] 生徒の学習状況の把握と対応

(1) 教科会及び教科主任会を活性化し、各教科で定期考査後のデータ分析により学習状況の把握をし、以後の授業に反映する。一年間の授業を総括し、シラバスを見直し有効活用する。
(2) 主体的で対話的な学びに関し研究を深め、グループワークなどの導入を図る。
(3) 2019 年度より実施している学力不振者への、入学後のリメディアル教育、定期考査前、考査後、長期休暇中の補習などによる学力補充の方策を検証し、継続して実施する。

[2] 教科教育活動の充実

(1) 授業内容を精選し、一時間一時間の授業を大切にする姿勢を教員・生徒ともに養う。しっかりとした知識を身に付けることを大前提として、さらに自ら考える力を養うための授業を進めていく。国語力・読解力を養うことをすべての教科を通して意識する。また、教科会で「思考コード」の考え方を用いて考査の評価を行い、知識偏重から脱することを目指す。
(2) グローバル商大コースを中心に実用英語検定、簿記検定、ＩＣＴプロフィシエンシー検定（Ｐ検）など資格取得を前提とした指導体制を維持し、合格率向上を目指す。また、検定前補習を担当者任せではなく、学校全体の取り組みとするようシステム化する。
(3) 導入済みのスタディサプリについては休暇時の課題、通常の授業の補完ツールとして活用することができているが、教科、教員に偏りが出ないように、組織的な活用を進める。
(4) 2023 年度より全生徒に導入するタブレットを有効活用するための方法論について、教科会を中心に検討する。教員には、準備のため本年次に先行してタブレットを配付する。

□生活指導構想

[1] 基本的生活習慣の確立、規範意識の育成

(1) 理想とする「生徒像」を、行事、集会など機会がある毎に、生徒に伝え指導し続ける。つまり問題事象の発生を未然に防ぐ「予防的な指導」を目指す。特に自尊感情を持ち、自己肯定感を高めることで、行動に責任を持てるようにする。
(2) 教職員全員で、生活指導を行うという意識を徹底する。
(3) 校則遵守を徹底し、頭髪、服装などの違反ゼロを目指す。生活指導週間を有効に活用する。
(4) 目標値を掲げて取り組んでいる遅刻指導を継続的に実施するとともに、登下校指導を計画的に実施する。
(5) 美化意識を高め、大掃除などを通じて校内美化に努める。
(6) 交通安全指導や性教育、薬物乱用など危機管理につながる講座や携帯電話使用やスマホ依存教室など社会人としてのマナーを養う講座を行う。

[2] 帰属意識の高揚

(1) 生徒自治会を中心に、体育祭、文化祭、校内大会などの行事を、生徒の企画・運営で実施し、活性化する。体育祭については、熱中症対策、雨天対策として、外部体育館での実施とする。
(2) 学年や自治会活動を中心にＨＲ活動の充実を図る。
(3) クラブ活動の充実を図るため、生徒自治会を中心にクラブ入部率を高める活動を行うとともに、校外での練習場所の確保、施設設備の改善、これに必要な予算措置など支援する方策を実施する。

[3] 特別支援教育の充実、不登校生対策の強化・改善

(1) 特別支援教育理解のために啓発活動を行うとともに、特別教育支援コーディネーターを任命し、対象者の支援計画を立案できるような体制作りを進める。対象生徒の中学時の支援計画を参考に継続指導できるように中学校との連携を強化する。
(2) 不登校生徒に関する教務内規に沿って、不登校生徒のスクリーニング等を早期に行い、サポートルームを活用しつつ対応する。2021 年度にカウンセラーの勤務時間を実態に合わせた形で調整したが問題がなかったので、この体制を継続する。
(3) 保健委員会を中心に発達障害や不登校生について生徒理解を深めていく。さらに、一学期に身体的に問題を抱えた生徒の情報交換会を実施する。また、アンガーマネジメントやコーチングを行うといった手法について研究していく。

□進路指導構想

[1] 進路意識の高揚と進路実績の向上

(1) 三年間を通して計画的に進路指導を行い、適切な情報提供をすることで、進路に対する目的意識を形成するとともに学習への意欲を高める。特に 1 年次を大切にし、総合的な探求の時間ともリンクして流れのあるものとする。
(2) 文理進学コースでは、パラダイムシフトによる内発的動機付けを行うことで、国公立大学および難関私立大学への意欲を高め、合格数を増やす取り組みを行

う。
(3) 就職や公務員試験受験を含め多様な進路選択に対応できるような指導体制を構築する。

[2] 系列大学との連携強化

(1) 1年次より系列大学のリテラシーの場を設けるなど、三年間を通じて計画的な進路指導を行う。
(2) デザイン美術コースを中心として、教員を招いての本校での授業や夏季休暇を利用した大学での授業等で神戸芸術工科大学との連携強化を図る。また、保護者対象の芸工大見学ツアーなどを企画し、受験先として選択されるための一助とする。

□入試・渉外構想

[1] 広報活動の強化

(1) 全教員で募集活動を行うという意識を持つ。
(2) 東大阪、八尾、大阪市など地元を中心に、中学校への渉外活動を重点的に実施する。アスリート推薦での訪問を活かし、広範囲で本校を周知する活動を行う。
(3) 中学校への出前授業については、積極的に引き受ける。
(4) 学習塾への訪問回数を増加し、広報活動に努める。学習塾長対象説明会のみならず、塾を訪問しての説明会を提案する。
(5) 学校案内（パンフレット）作成にあたり、業者との連携をしっかりと取り、本校のアピールしたい内容をしっかりと伝えることのできるものをつくる。
(6) 本校でのオープンスクール、入試説明会を全教職員で取り組み、生徒の参加や協力も得ながら内容をさらに充実する。With コロナ禍での、説明会のノウハウを蓄積する。
(7) 行事やクラブ活動など本校の情報を積極的に発信し、ホームページの更新頻度を高めていく。
(8) 2022 年度入試より導入したネット出願について検証する。

[2] 専願受験者の確保

(1) コースコンセプトを明確にし、コース目標を達成するための教育活動をアピールすることで専願志願者増を目指す。
(2) スポーツ専修コース 3 クラス 90 名以上の確保を目指し、スカウティングに注力する。スカウティングでは、他校と競合することも多く、その際に施設設備面の比較から他校を選択される場合も多い。5 クラブが共用しているグラウンド、他校で整備されている人工芝グラウンドやタータントラックなどの設備面、柔道場などの時間的制限などである。ここが将来的に安定して志願者を確保するための一つの大きな受け皿になると考えられるので、法人と協議しつつ、施設設備面での改善を進めていきたい。
(3) 充実した特待生制度について広報を強化するとともに、中学校へ丁寧に説明することで理解を得るようにする。
(4) 改修した芸術Ｉ教室、放課後デッサン指導や学習指導、また、アドバンテージである神戸芸術工科大学との連携を強く打ち出すことでデザイン美術コースへの専願志望者を増加させる。また、デッサン講習会へ参加し、優秀な結果を出した生徒の所属する中学校へ本校美術教員が訪問するなどの直接的なアプローチを行う。

[3] 女子生徒の確保

(1) 志願者の 40%、入学者の 33%を目標に取り組む。
(2) 2022 年度より変更する体育授業時のジャージや、サニタリーボックスを設置したトイレ、什器の入れ替えなどを行い明るい雰囲気となった食堂など、近年改善してきた点をアピールしていく。また、さらに女子生徒に魅力的な学校を目指して、明るいイメージの校舎・教室を目指して、改善に向けて努力していく。
(3) 女子生徒に魅力あるクラブの増設を考え実行する。運動部では、陸上競技部、柔道部、剣道部で募集活動を積極的に行う。また、これらのクラブについては、サポートできる女性スタッフを検討する。

□教員の研究・研修構想

[1] 教員の教育力向上

(1) 2021 年度より実施している時間講師も含めて全教員が行う公開授業（研究授業）を継続実施する。見学した教員の事後アンケートを教科担当者にフィードバックすることで、授業内容・方法の向上を図る。
(2) 校内研修会を実施し、教員の教育力向上を図るとともに意識統一を行う。教務部主催の放課後ミニ研修会や常勤講師対象研修会は継続して実施する。
(3) 外部研究会への積極的な参加を促し、参加後に研修会や教科会で報告し、全体に情報が共有できるようにする。
(4) 学校評価や授業評価を実施し、授業分析や授業改善の指針とする。
(5) 教科会を充実し、教科内での意見交換や止揚の場、教科教育力向上の場として活用する。

[2] 教員組織の活性化

(1) 職場の雰囲気は良く、教育目標を共通認識し、教員相互で助け合える組織となりつつあるので、さらに安心して働ける環境づくりを行う。会議等の進め方について研修を行う。
(2) 学校施策や行事を責任の所在を明確にした上で企画・運営していく体制づくりを行い、運営委員会、校務分掌会議、コース運営会議、学年会、教科会などが、機能的に働くようにする。また、目的に沿った総括を行い、ＰＤＣＡサイクルを意識する。
(3) 年間を通して常勤講師研修会、年度当初に講師説明会を実施し、全先生方で同じスタンスで指導し、問題点を共有できるようコミュニケーションを取ることを心がける。

[3] 変革する教育への対応

(1) 大学入学共通テストについて分析を行い、該当教科、進路指導部を中心に対応を進める。また、英語外部検定試験の復活、教科「情報」等、情報収集に努め適切に迅速に対応できるような体制をつくる。
(2) ＩＣＴ教育について、タブレットの有効活用を中心に検討していく。
(3) 主体的・対話的で深い学び、英語の 4 技能など新しい教育の方法論について、外部研修会を中心に学び、教科教育として取り入れていく。
(4) クラブ活動の在り方について、学校方針（学校長方針）を検討し、提示する。
(5) 公立高校のクラス定員減少化検討という流れを受けて、経営的には負担となるが 35 名の学級定員について、法人へ相談しつつ検討する。

□その他

[1] 保護者との連携強化

(1) ＰＴＡ活動へ教員全体で参画・協力する。
(2) 家庭で学業成績や学校生活の様子を把握してもらうために、一学期および二学期の年 2 回クラスで三者面談を実施し、一学期および二学期中間考査後に結果を郵送などで報告する。また、保護者対象に公開授業を実施し、学校・授業の様子を見てもらう機会とする。
(3) さくら連絡網を家庭との連絡の手段として活用する。特に学校からの一方的な連絡に留まらず、欠席連絡やアンケート回収など保護者からの連絡ツールとしても有効利用する。
(4) 就学支援金及び授業料支援補助金と授業料との相殺により、家庭の負担軽減に努める。

[2] 地域との連携

(1) コロナ禍が終息に向かうことを前提に、クラブを中心に東大阪市民ふれあいまつりなど地域行事へ参加・協力をする。また、文化祭など本校行事を近隣へ案内し、本校の様子を知っていただく一助とする。
(2) 第三者評価委員会を設けるに当たり、近隣自治会などへ協力依頼を行う。

[3] 大阪商業大学附属幼稚園との連携

(1) 本校デザイン美術コースの協力授業を継続して行い、連携を図っていく。
(2) 運動会、避難訓練、夕涼み会など幼稚園行事へ協力する。

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価アンケートの結果と分析[令和４年１２月実施分]	学校評価委員会からの意見
□学校生活全般 ○「学校の雰囲気がよい」 肯定的回答(生徒　男 79%　女 71%、保護者 89%、教員 66%) 参考）昨年度　(84)　(72)　(88)　(78) ○「自分のクラスが楽しい」 肯定的回答(生徒　男 90%　女 82%、保護者 86%、教員 89%) 参考）昨年度　(91)　(79)　(84)　(92) 【分析】 「**学校の雰囲気について**」の質問に対して、保護者は約 90%が肯定的な回答である。これは昨年度と大きな変化はない。生徒の肯定的な回答が約 80%というのも昨年度と大きな変化はない。その中で気になるのは、教員の否定的な回答が昨年から 10 ポイント程度増えたことと、女子生徒の約 30%が昨年に引き続き否定的な回答となっていることである。女子生徒が過ごしやすい環境作りは共学化以来の継続している課題となっており、検証し改善しなければならない。 「**あいさつに溢れる学校**」については、生徒ならびに保護者は、肯定的意見が多くを占めている。それに対して教員では約 50%が否定的な回答となっている。しかも教員の否定的な回答は昨年度より 13 ポイント上がっている。この意識の差が何から生じているものかは早急に検証していく必要があろう。クラブ員を中心とした校内での挨拶習慣がある程度定着していると評価できる一方、教員の否定的回答の詳細を分析し、生徒からの一方的な取り組みだけではなく、大人(教職員)から挨拶励行を継続することが求められるのではないだろうか。学校生活の根幹となっている「あいさつ」に関して見直す必要がある。 「**クラス活動**」については、各学年ともに肯定的な回答が約 85%以上出ていることは評価できる。今年度は予定されていた学校行事をほぼ例年通りに行うことができたことも肯定的な回答につながったものと思われる。その上で、日々の学習活動やクラス活動の充実が肯定的回答へつながっている一番の要因と思われる。今後も生徒たちと学級担任とともにクラス活動を豊かなものにする努力を行っていくことを大切にしなければならない。 「**コースの取り組み**」について、例年通り生徒は概ね肯定的な回答であるが、教職員は否定的回答が高くなっている。これをここ数年改善できていない。改善するためには、昨年度策定された各コースの３つのポリシーをさらにわかりやすいものにし、浸透させていく必要がある。そして、全教員が各コースの取り組みを共有し、全教員一丸となって各コースの取り組みに力を入れていくことで、教員の否定的回答の改善につなげることができると考える。 「**資格取得の多様性**」は生徒、保護者、教職員ともに概ね肯定的回答である。特に３年生は昨年度に比べ、10 ポイント程度肯定的回答が増えている。各種検定への合格率の向上は、さらに肯定的なベクトルとなっていくと思われる。資格取得をメインに掲げているグローバル商大コースの充実にも繋がる項目であるので、教科のみでなく、学年の枠を超えて学校全体で考え、盛り上げていくことが急務である。１年次から目標を設定し継続的にモチベーションを持たせることも考えていかなければならない。 「**教員の教育熱心さ**」については、生徒からは 80%程度の肯定的な回答が出ており、保護者からも約 90%が肯定的な回答となっている。それに対して教員の肯定的回答は、70%程度にとどまっている。普段の授業の取り組み、ICT 等を駆使した生徒への指導、電話や面談などの個々の対応など、日々の各教員の取り組みの結果であると思われる。その一方で教員の肯定的回答が少ないのは、まだまだもっとできることがあるのではないかと自分をみつめた結果なのか、そうでないのか、そのあたりは分析していく必要がある。	＊新型コロナウィルス感染防止のため、令和５年３月１１日（土）に実施予定であった「学校評価委員会会議」は中止となりました。 →参加予定の各委員の方々に文章にて内容確認を行い、書面にて意見の集約を行いました。掲載分のご意見に関してましては、委員会の方々のご意見をそのまま掲載させていただいております。 ・運動部の生徒のみなさんは、積極的なあいさつが目立つ一方、そうでもない生徒さんが多数いるのも感じられ、その点が先生方の評価につながるのかなと思いました。 ・女子生徒の否定的回答の具体的内容をヒアリングして、ハード面（校舎、施設等）での意見であれば、早く改善できるところは改善していくことが重要である。 ・生徒や保護者は全体的に肯定的な回答をされておられますが、他方で先生方が否定的な回答をされており、項目によって昨年度よりポイントが上がっているところが気になります。否定的回答の具体的内容をヒアリングして、改善できるところから改善していくことが必要ではないかと思います。 ・あいさつに対する教員と生徒の感じ方に大きな差異がある。早急に教員の意見を聞き対策を取らねばならないと思う。意思の疎通は教育の根本に関わる問題と考える。 ・生徒の満足度も高く教員としてもうれしい限りです。 ・もっと多くの教員が生徒によりそえるよう、仕事のスリム化をはかりたい。生徒の相手をしたくても、会議などで時間をかけてやれない。 ・８０%の肯定的回答であれば十分な取り組みかと存じます。 ・授業のわかりやすさに対し、生徒、保護者の肯定的な回答が 8 割を超えているというのは先生方の熱心な指導の結果であると思います。
□学習に関して ○「先生の授業はわかりやすい」 肯定的回答(生徒　男 86%　女 82%、保護者 87%、教員 80%) 参考）昨年度　(85)　(81)　(85)　(89) ○「(生徒は）意欲的に学習に取り組んでいる」 肯定的回答(生徒　男 79%　女 79%、保護者 76%、教員 39%) 参考）昨年度　(78)　(71)　(75)　(43) 【分析】 「**授業のわかりやすさ**」について、生徒間で各学年ともに約 80%の肯定的な回答となった。昨年度とほぼ変わりはない。保護者においてもほぼ同じような結果となっている。教員に関しては、昨年度よりわずかばかり肯定的回答が減った。「授業がわかりにくい」等の意見、クラスによっては「(科目によって）授業中騒がしい場合がある」との声も聞いている。この声は毎年少なからず聞かれるものであるが、その声が０となることが学校として望ましい結果である。何を改善する必要があるのかを確実にとらえていかなければならない。そのためには実施している授業アンケートの見直し、教科会での勉強会の充実、公開授業を利用しての学び合いなど今あるものの改善に取り組まなければいけない。今後、教科を中心として、わかりやすく、学んでいきやすい環境を創造していくことも求められる。 「**授業への意欲的な取り組み**」は例年通り、生徒・保護者と比較して、教員の意見が厳しいものとなっている。生徒・保護者も授業に意欲的に取り組んでいると思い、教員はそのように感じていない。その差異は、「意欲的」という言葉をどのように解釈しているかの差異のようにも思われる。今年度もその差異を埋めることができなかった。教員が思うところの「意欲的」に取り組む姿勢がどのようなものであるかを具体的に示す必要がある。	・実際うちの子どもは成績が右肩下がりでありました。意欲的ではなかったと思っています。先生方にはご迷惑をおかけしたなあと思っています。 ・「授業に意欲的に取り組んでいる」について、生徒は取り組んでいるつもりが、教員は否定的回答の数値が高く、ギャップを感じる。 ・資格取得に関しては、学年ごとにもう少し雰囲気づくりが必要かと思います。 ・授業に工夫していると感じる反面、基礎的能力や学力に欠ける教員も見られる。コミュニケーションをとることができない教員も多く、大変残念である。キャリアのある教員は良いものを残せない。

自己評価アンケートの結果と分析[令和４年１２月実施分]	学校評価委員会からの意見
□進路指導に関して ○「授業・模擬試験が進路に対応している」 肯定的回答(生徒　男 85%　女 82%、保護者 85%、教員 55%) 参考）昨年度　(86)　(80)　(80)　(60) ○「進路の情報は適切に提供されている」 肯定的回答(生徒　男 91%　女 85%、保護者 89%、教員 85(%) 参考）昨年度　(92)　(85)　(86)　(80) **【分析】** **「授業・模擬試験の進路への対応」**について、生徒・保護者の肯定的回答は 80%を超えるものとなっている。それに対して教員の回答はまだ否定的なものが多い。教員は自分が授業や行っている模擬試験に対して、まだまだやれることがあるのではないかという問題意識をもってとらえていると推測できる。授業の分析をはじめ、模試・学力テストなどのデータ分析、そしてそのデータの共有、教科へのフィードバック、改善策の検討、実施というサイクルが常に必要である。このサイクルをさらに充実させることで、教員の肯定的回答も上昇し、生徒にとってより進路に対応したものになると考える。 **「進路情報の提供」**については、進路指導部を中心に、進路ガイダンスや将来を考えさせる機会を提供しており、概ね肯定的な回答を得ている。特に３年生は 90%の肯定的回答を得ている。今年度は大学入試改革３年目、コロナ禍による入試も３年目とあり、全く混乱はなかったように思われる。３年生の肯定的回答のポイントが高いのは、正確な情報をタイムリーに提供されているからのように思う。今後もタイムリーに情報は提供されていく必要がある。	・令和４年度は進学先がすごく多彩で、医学部の合格というのは非常に大きいと思っています。生徒の力量もありますが、学校としてのサポートも非常に大きかったのではないでしょうか。 ・生徒の将来に対する指導について、生徒、保護者の肯定的な回答が８割を超えているということは先生方の熱心な指導の結果であると思います。 なお、高校での学習は大学入学後も大いに役立つため、受験科目以外の教科の学習を疎かにしないこと、たくさんの選択肢の中から自分に合った進路を調べ、そこから選ぶようにご指導いただけると大学側も大変助かります。 ・模擬試験等の点数面での指導も重要と思いますので、先生方の頑張りが、数値としてあらわれているのかと存じます。また、大学で学ぶことの様々なメリットや、生徒にあった学部・学科の適切な指導もあわせてよろしくお願い申し上げます。 ・「進路に対応している」のポイントが高いが、そうは思えない。文理は対応していて当然だが、グローバル商大コースは対応していない。グローバルでも共通テストは対応できる内容を各教科が提供するべき。 ・多様な選択が可能となり、生徒への情報伝達に苦労した。進路部長主催の学習会が役に立った。
□生活指導 ○「教員は悩みを親身になって聞いてくれる」 肯定的回答(生徒　男 84%　女 80%、保護者 84%、教員 93%) 参考）昨年度　(86)　(79)　(84)　(93) ○「学校の規則は妥当か」 肯定的回答(生徒　男 68%　女 58%、保護者 85%、教員 74%) 参考）昨年度　(72)　(62)　(87)　(78) ○「学校の規則を守っているか」 肯定的回答(生徒　男 77%　女 67%、保護者 87%、教員 26%) 参考）昨年度　(81)　(72)　(90)　(39) ○「生活指導についての納得度」 肯定的回答(生徒　男 71%　女 59%、保護者 84%、教員 44%) 参考）昨年度　(71)　(61)　(85)　(57) **【分析】** **「教員は悩みを親身になって聞いてくれる」**は三者（生徒・保護者・教員）ともに例年通り、肯定的回答が大部分を占めた。学校方針でもある、日ごろのきめ細やかな教育活動の成果であると評価できる。しかし、教員の肯定的回答より生徒・保護者のポイントが 10 ポイント程度低いことは、教員が自己満足に陥ってないか真摯に受け止めなければならない。また、女子生徒の肯定的回答が低いことも見逃してはならない。 **「学校の規則の妥当性」**については、生徒間においては、否定的意見が 35%である。特に女子生徒での否定的割合が依然高く（約 40%）、例年と変わらない傾向が続いているものの、今年度はやや否定的回答が増えた。なぜ校則が必要なのか、粘り強く説いていくことが必要である。 **「生徒が規則を守っている」**は例年と同じく、生徒の数値と教員の数値に大きな差が生じている。今年度は教員の否定的回答が 13 ポイント増加している。このことは重く受け止めなければいけない。多くの生徒は校則を守っているが、一部の校則を守っていない生徒に対しての指導に多くの労力を費やしていることなどから、教員が指導できていないのではないかという意識の裏返しとも受け止めることができる。『指導する』側（教員）と『指導される』側（生徒）の立場の違いがあるなかで、その数値を近づけていくために、なぜ校則があるのか、校則を遵守することがなぜ大切なのかを繰り返し説いていくことができることの一つではないだろうか。 **「生徒は生活指導に納得している」**については、生徒間においては、肯定的意見が約 70%、否定的意見が約 30%となっている。昨年度とほぼ変わらない結果となった。ここでも女子生徒の否定的意見の割合が男子生徒に比べて高くなっている。今年度は３年生の肯定的回答が 10 ポイント程度高くなった。 **「ベル着を守っている」**について、例年通り生徒は概ね肯定的な回答であるが、教員の数値は肯定的回答が昨年度よりもさらに減った。「５０分間しっかり授業を行う（受ける）」「授業第一」の意識が定着しかけていたものが、ここにきて薄れてきているのではないかの懸念がある。	・一部の生徒が校則を守っていない現状を守っている生徒が批判する。生徒の持つ不公平感はなるべく解消したい。 ・制服の着方にルーズさがみられるなあと思います。 ・学校の規則の妥当性は非常に難しい課題かと思います。保護者の 85%が肯定的ととらえられているので、その内容の妥当性は担保できているかと存じます。ただ、教員の 25%の人が、否定的であるのは気になるところかと思います。若い先生と年配の先生、性別の違いでずいぶん違ってくるのかと思います。ダイバーシティも加味しつつ、より充実した生徒指導を期待しております。 ・近年、学校の規則（校則）は、生徒側の理解を得ることが難しくなっているという報道もあります。否定的な回答が増えてきているということは、ひと昔前はあたり前であったことが、現在では受入れ難くなっているということかもしれません。いずれ時代の流れとともに見直しが必要になる時が来るかもしれません。今後の検討課題として捉えていただいても良いのではないかと思います。 ・「生徒は学校の規則を守っている」について多くの生徒が守っているつもりだが…。これも教員とのギャップが大きくわかりあえていない。時代の流れもあるため、双方の考えをすり合わせる機会があるといいかもしれない。 ・今後も生徒の対応について苦労することが多々あると思います。生徒の方をしっかり見て親身になって指導すれば必ず良い方向に向かうと思います。

自己評価アンケートの結果と分析[令和４年１２月実施分]	学校評価委員会からの意見
□設備について ○「校内の施設・設備はよく整備されている」 肯定的回答(生徒　男 58%　女 59%、保護者 72%、教員 23%) 参考）昨年度　(56)　(56)　(70)　(24) **【分析】** **「校内施設設備」**については、否定的回答が他の項目よりも多い。生徒・保護者はわずかだが、昨年度より肯定的回答のポイントが上がった。それに対して教員の否定的意見が 80%近くに及んでいる。校内施設改善は今後も計画的に進められていく必要がある。また、現存の施設の有効的使用および生徒の美化意識向上も継続して必要であろう。	
□その他 ○「学校行事は楽しく充実している」 肯定的回答(生徒　男 87%　女 77%、保護者 87%、教員 79%) 参考）昨年度　(78)　(69)　(72)　(59) ○「部活動は活発で充実している」 肯定的回答(生徒　男 86%　女 87%、保護者 86%、教員 82%) 参考）昨年度　(86)　(83)　(84)　(77) ○「入学して（させて）よかった」 肯定的回答(生徒　男 78%　女 83%、保護者 89%、教員 81%) 参考）昨年度　(78)　(69)　(88)　(80) **【分析】** **「学校行事」**について、今年度は生徒に関して全学年で肯定的回答が高く 80%を超えている。これは、今年度は全ての行事を実施することができたことが大きな要因であろう。昨年行事が中止となった第３学年の肯定的回答が 60%程度だったことからも、実施できたことの大事さを実感できよう。教員ならびに全生徒の肯定的回答が昨年度より大幅に増えたことは、行事が充実していたことを物語っているのではないだろうか。例年女子の肯定的回答が低いこともあり、生徒全員が楽しめる行事づくりは今後も課題として残っていくものと思われる。 **「部活動」**についても、肯定的回答が多数を占めている。学年が上がるごとに肯定的回答が増えていることにも注目したい。３年間続けることで得られる充実感があるのではないだろうか。活動施設の問題については多くの意見が寄せられているのが現状である。しかし、来年度は人工芝グラウンドもできることでより充実したクラブ活動につながるのではないかと思われる。 **「入学して（させて）よかった」**については、概ね肯定的意見が多数を占めている。特に３年生の肯定的回答と女子生徒の肯定的回答が増えている。要因はさまざまであろうと推測できる。教員は入学させてよかったと思われるように日々の教育活動をブラッシュアップしていかなければならないであろう。例年、女子生徒の肯定的回答が男子生徒と比べ低かったが、今年度はほぼ同割合の結果となった。これは画期的な結果といえよう。今後も各学年が学校生活へのモチベーション向上への取り組みを行うことが大切であると考える。本校の募集活動にもリンクしていくことになるので、全教職員で取り組んでいかなければならない。	・主要な行事が戻ってきて、生徒さんも活気が出てきたのかなと思いました。令和５年度は、文化祭の飲食ブースの復活ができたらいいなと期待しています。 ・特に雨の日の通学マナーは改善の必要があると感じています。マナーを守らなかったが故に事故に遭うということがないようご指導いただけると良いかと思います。 また、新型コロナウイルス感染症対策については、大学も試行錯誤の繰り返しで、正解がない取り組みです。令和５年５月８日から感染症法上の位置づけが２類から５類に変更されますが、ウィズコロナ、アフターコロナの対応をしっかりとしていただき、生徒が充実した高校生活を送ることができる環境を整備していただければと思います。 ・学校行事は楽しく充実している。コロナ感染対策に対して肯定的に評価されている。学校の教育環境は評価されたと感じる。 ・特にありませんが、最後の学年でたくさんの思い出に残る行事が出来ればと思います。文化祭も今年は模擬店など出来ればいいと思います。 ・行事の大切さを痛感しました。

自己評価アンケートの結果と分析[令和４年１２月実施分]	学校評価委員会からの意見
□情報共有・通学マナー・コロナ感染症対策について ○「さくら連絡網などによって、学校の情報は適切に伝えらえている」 肯定的回答(生徒　男 94%　女 90%、保護者 97%、教員 94%) 参考）昨年度　(77)　(58)　(95)　(96) ○「自転車や歩行の交通ルールを守って登下校している」 肯定的回答(生徒　男 82%　女 78%、保護者 95%、教員 19%) 参考）昨年度　(76)　(68)　(93)　(28) ○「学校のコロナ感染症対策はされている」 肯定的回答(生徒　男 87%　女 86%、保護者 87%、教員 54%) 参考）昨年度　(69)　(63)　(89)　(58) **【分析】** 「**さくら連絡網**」については、生徒、保護者、教員全てにおいて約 90%が肯定的回答となった。この連絡網の導入により、今まで生徒に配布しても保護者の手元まで届かなかったお知らせプリントなども保護者に直接配信できることで、学校からの情報が行き渡るようになったものと思われる。 「**通学マナー**」について、今年度も地域の方から本校生の通学マナーの悪さについてのご連絡が何度となく入った。しかし、生徒は肯定的回答が多く、その数値は 80%近い。それに対して、教員は圧倒的に否定的回答が多く、意識が乖離している。大半の生徒は交通ルールを守って登校しているにも関わらず、一部のマナーの悪い生徒が本校の通学マナーは悪いというイメージをつくっているのではないかとも思われる。また、自分たちはマナーは良いと誤解をしている生徒がいる可能性もあるため、普段の教員の指導が今後も大切になってくると同時に、新学期の早い時期に交通マナーについて、共通の理解を得るような講話も必要と思われる。 「**コロナ感染症対策**」については、生徒・保護者の肯定的回答が約 80%であるのに対して、教員の肯定的回答が約半分に留まっている。これは教員としてコロナ感染症対策としてまだまだできることがあったのではないという思いが反映されているものと思われる。	・さくら連絡網、この時世、素晴らしい活用かと思います。

３．本年度の取組内容及び自己評価

<table>
<tr><th>中間的目標</th><th>今年度の重点目標</th><th>具体的な取組計画・内容</th><th colspan="2">評価指標</th><th colspan="2">自　己　評　価
［◎-評価 80%以上　○-評価 60%
△-評価 40%　×評価 20%以下］</th></tr>
<tr><td rowspan="15">□学習指導構想</td><td rowspan="15">[1] 生徒の学習状況の把握と対応
(1) 教科会及び教科主任会を活性化し、各教科で定期考査後のデータ分析により学習状況の把握をし、以後の授業に反映する。一年間の授業を総括し、シラバスを見直し有効活用する。
(2) 主体的で対話的な学びに関し研究を深め、グループワークなどの導入を図る。
(3) 2019 年度より実施している学力不振者への、入学後のリメディアル教育、定期考査前、考査後、長期休暇中の補習などによる学力補充の方策を検証し、継続して実施する。

[2] 教科教育活動の充実
(1) 授業内容を精選し、一時間一時間の授業を大切にする姿勢を教員・生徒ともに養う。しっかりとした知識を身に付けることを大前提として、さらに自ら考える力を養うための授業を進めていく。国語力・読解力を養うことをすべての教科を通して意識する。また、教科会で「思考コード」の考え方を用いて考査の評価を行い、知識偏重から脱することを目指す。
(2) グローバル商大コースを中心に実用英語検定、簿記検定、ＩＣＴプロフィシエンシー検定（Ｐ検）など資格取得を前提とした指導体制を維持し、合格率向上を目指す。また、検定前補習を担当者任せではなく、学校全体の取り組みとするようシステム化する。
(3) 導入済みのスタディサプリについては休暇時の課題、通常の授業の補完ツールとして活用することができているが、教科、教員に偏りが出ないように、組織的な活用を進める。
(4) 2023 年度より全生徒に導入するタブレットを有効活用するための方法論について、教科会を中心に検討する。教員には、準備のため本年次に先行してタブレットを配付する。</td><td>・各教科定期試験などのデータ分析</td><td colspan="2">各教科定期試験データ分析を教務部中心に行った。教科会議においても議題とし、適切な成績評価につながるようした。</td><td>◎</td></tr>
<tr><td>・学力不振者への学期末補習実施
・学力テストデータを基にしたリメディアル教育の実施</td><td colspan="2">学力不振者に対して、リメディアル教育および各学期末に欠点者補習を行ったが、一部で怠学もあり、今後見直しが必要である。</td><td>○</td></tr>
<tr><td>・業者学力テストの有効利用</td><td colspan="2">業者学力テストについては、事前学習から事後学習まで実施できたが、スタディサプリの配信に留まったものの、自己採点は、早期に振り返りができ、次の学習へのモチベーションに繋がっている。</td><td>◎</td></tr>
<tr><td>・ベル即授業→50 分間授業提供の徹底</td><td colspan="2">ベル着の習慣がマンネリ化してきている。これは一昨年度より現れてきている傾向である。（生徒アンケート調査の結果 72%が「ベル着を守っている」との回答←昨年 75%　一昨年 74%　三年前 93%）</td><td>○</td></tr>
<tr><td>・各教科での「思考コード」の考え方を用いての考査の評価を実施</td><td colspan="2">「思考」の問題を取り入れることはできたが、採点基準や難易度については課題が残った。経験を重ねるとともに他の事例の研究が必要である。</td><td>△</td></tr>
<tr><td>・授業態度調査の実施</td><td colspan="2">授業への参加態度の生徒の個人差を把握するため、授業態度調査を行った。</td><td>○</td></tr>
<tr><td rowspan="5">・各種検定合格率向上およびそれに向けての学校全体としての取り組み</td><td colspan="3">◆◆各検定試験合格数について目標設定・評価◆◆</td></tr>
<tr><td>英検準２級→受検者数の 60%合格</td><td>・英検準2級合格→合格 44 名
＜受検 184 名＞---合格率　24%(昨年 24%)
＊2級合格者 5 名となり昨年度の 27 名より大幅減となった。</td><td>△</td></tr>
<tr><td>全商簿記検定 2 級→受検者数の 50%合格</td><td>・全商簿記検定2級
→合格 53 名＜受検 182 名＞
---合格率　29%(昨年 22%)
昨年度より合格率が上昇した。</td><td>◎</td></tr>
<tr><td>ICT プロフィシエンシー検定(P 検)の受検→3級合格</td><td>・P 検→3級合格 53 名＜受検数 89 名＞
---合格率 60%（昨年 74%）
*準２級合格者 49 名、合格率 80%（昨年 65%）
＊全商情処理検定 3 級合格者 21 名、昨年の 41 名より減となった。</td><td>△</td></tr>
<tr><td colspan="3">※合格数や合格率が昨年度並、もしくは上昇したことは評価できる。ただし、英語検定２級の合格者数の下降に関しては、何が影響したのかは分析しておく必要はあろう。</td></tr>
<tr><td>・3 年目としての「まな部」</td><td>3 年目となる「まな部」は、グローバル商大コース、デザイン美術コースの進学補習の位置づけとして実施</td><td>３年生　12 名（国語 12、英語 8）
２年生　16 名（国語 16、英語 12）が参加
人数は減ったが、意欲の高い生徒が集まってきているので、高い進学意識をもって推薦でなく筆記で自ら自分の道を切り開く生徒が増えている。</td><td>○</td></tr>
</table>

中間的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自　己　評　価 ［◎-評価 80%以上　○-評価 60% △-評価 40%　×評価 20%以下］	
□生活指導構想	**[1]基本的生活習慣の確立、規範意識の育成** (1) 理想とする「生徒像」を、行事、集会など機会がある毎に、生徒に伝え指導し続ける。つまり問題事象の発生を未然に防ぐ「予防的な指導」を目指す。特に自尊感情を持ち、自己肯定感を高めることで、行動に責任を持てるようにする。 (2) 教職員全員で、生活指導を行うという意識を徹底する。 (3) 校則遵守を徹底し、頭髪、服装などの違反ゼロを目指す。生活指導週間を有効に活用する。 (4) 目標値を掲げて取り組んでいる遅刻指導を継続的に実施するとともに、登下校指導を計画的に実施する。 (5) 美化意識を高め、大掃除などを通じて校内美化に努める。 (6) 交通安全指導や性教育、薬物乱用など危機管理につながる講座や携帯電話使用やスマホ依存教室など社会人としてのマナーを養う講座を行う。 **[2] 帰属意識の高揚** (1) 生徒自治会を中心に、体育祭、文化祭、校内大会などの行事を、生徒の企画・運営で実施し、活性化する。体育祭については、熱中症対策、雨天対策として、外部体育館での実施とする。 (2) 学年や自治会活動を中心にＨＲ活動の充実を図る。 (3) クラブ活動の充実を図るため、生徒自治会を中心にクラブ入部率を高める活動を行うとともに、校外での練習場所の確保、施設設備の改善、これに必要な予算措置など支援する方策を実施する。 **[3] 特別支援教育の充実、不登校生対策の強化・改善** (1) 特別支援教育理解のために啓発活動を行うとともに、特別教育支援コーディネーターを任命し、対象者の支援計画を立案できるような体制作りを進める。対象生徒の中学時の支援計画を参考に継続指導できるように中学校との連携を強化する。 (2) 不登校生徒に関する教務内規に沿って、不登校生徒のスクリーニング等を早期に行い、サポートルームを活用しつつ対応する。2021 年度にカウンセラーの勤務時間を実態に合わせた形で調整したが問題がなかったので、この体制を継続する。 (3) 保健委員会を中心に発達障害や不登校生について生徒理解を深めていく。さらに、一学期に身体的に問題を抱えた生徒の情報交換会を実施する。また、アンガーマネジメントやコーチングを行うといった手法について研究していく。	・通常の登下校指導だけでなく、教員全員で生活指導週間において登校指導を行った。 ・学年集会、コース集会などを通じて、マナー意識の徹底などを行う。 ・生徒の人権などを配慮した丁寧な指導 ・年間遅刻数目標を 4000 名以下とし、生徒指導部だけでなく、学年でも細やかな遅刻指導を行い、遅刻数減少への取り組みを行う。 ・生徒対象マナーや性教育などの講座の開催 ・スマホのマナー（朝礼～終礼時までの使用禁止、歩きスマホ、音だし等の禁止）に対して指導を行う。 ・生徒自治会を中心とした、各種学校行事への取り組み ・コロナ禍における北海道修学旅行実施に向けて、準備を行う。 ・コース別修学旅行の実施に向けての準備を行う。 ・不登校生徒に関する新規内規運用	教員全員による登校指導の実施	全教員による対人マナーや校則を遵守させるよう努めたが、服装指導には多くの課題が残った。	△
			学年集会、コース集会の実施	今年度は学年集会、コース集会など大人数が集合しての集会を行うことができ、生徒への啓発活動は一定行うことができた。	◎
			学校全体の年間遅刻数を 4000 名以下にする	年間遅刻数 4987 名＜昨年 4078 名・一昨年 3258 名＞で目標数 4000 名以下を達成することができなかった。ここ数年 4000 名以下で推移していたが、昨年に引き続き 4000 名以上となってしまった。学校重視よりも感染防止優先という意識によって、他の校則を守るといった基本的な意識も低下したのかもしれない。	×
			交通安全講習会・性教育の実施	交通安全講習会は１学年を対象に、性教育は各学年で実施した。	○
			スマホマナーの徹底	普段より啓発活動を行っているにも関わらず、指導対象者が出てしまったことは残念である。	×
			各種学校行事への取り組み	各種行事を数年ぶりに今までどおり実施することができたが、コロナ禍の影響で変更をせざるを得ない部分もあった。その中でも生徒自治会の立案に対し生徒が積極的に取り組めたと評価でき、学校行事への満足度も上がっている。（生徒肯定的回答　今年度 84%　昨年度 75%）	◎
			北海道修学旅行準備	北海道修学旅行の準備が学年中心に進められ、無事に実施することができた。コロナ禍の中、今年度も無事に実施できたことは大きい。	◎
			次期コース別修学旅行の行先決定からの実施に向けての準備	修学旅行検討委員会のもと、次期コース別修学旅行の提案にいたったものを、行先の決定ならびに実施に向けての具体的な準備に入ることができた。	◎
			課外活動の実績	柔道部・バレーボール部・ボクシング部の全国大会での活躍、陸上競技部・空手道部の近畿大会での活躍があった。	◎
			不登校生徒認定に関して新ルールの定着	一昨年度から継続されている不登校申請に必要な書類から不登校委員会までの流れが定着し、申請から認定までがスムーズになった。	◎
			カウンセリング、不登校対策について	カウンセリング相談者数延べ人数は，168 名（昨年度 214 名，一昨年度 108 名）で，対象生徒数は 49 名，対象保護者数は 7 名（昨年度対象生徒 69 名、対象保護者 9 名）であった。新型コロナウィルスの影響が続く中、不安定な生徒も多く、大幅増となった昨年よりも件数としては減少したものの、まだまだ不安定な生徒が多いものと思われる。	○

中間的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自　己　評　価 ［◎-評価 80%以上　○-評価 60% △-評価 40%　×評価 20%以下］	
□進路指導構想	**[1] 進路意識の高揚と進路実績の向上** (1) 三年間を通して計画的に進路指導を行い、適切な情報提供をすることで、進路に対する目的意識を形成するとともに学習への意欲を高める。特に 1 年次を大切にし、総合的な探求の時間ともリンクして流れのあるものとする。 (2) 文理進学コースでは、パラダイムシフトによる内発的動機付けを行うことで、国公立大学および難関私立大学への意欲を高め、合格数を増やす取り組みを行う。 (3) 就職や公務員試験受験を含め多様な進路選択に対応できるような指導体制を構築する。 **[2] 系列大学との連携強化** (1) 1 年次より系列大学のリテラシーの場を設けるなど、三年間を通じて計画的な進路指導を行う。 (2) デザイン美術コースを中心として、教員を招いての本校での授業や夏季休暇を利用した大学での授業等で神戸芸術工科大学との連携強化を図る。また、保護者対象の芸工大見学ツアーなどを企画し、受験先として選択されるための一助とする。	・学年ごとの年間進路学習の立案	学年ごとに目標に応じた進路学習の計画・実施	各学年での進路ガイダンスを実施、１～２年には進路学習として「スタディサプリ進路」のワークシートを課した。進路意識と情報を整理する作業の一連の流れを今後は各ガイダンスや総合的な探究の学習と連携する工夫が必要である。	○
			◆進路実績向上への取り組み◆		
		・文理進学コースをはじめとする進路実績の向上、大学入学共通テスト受験奨励	大学入学共通テストへの受験奨励	試験受験者数は 30 名と、昨年度の 34 名から微減した。8 名が国公立大学に合格し、難関私大（関関同立産近甲龍）への合格数は 92 名となった。今年度は現役初の医学部への合格者も出た。	◎
		・『大学入学共通テスト』に対する研究、情報提供	大学入学共通テストに対する研究	３回目を迎えた今回も難易度の差は教科によって異なったものの、「思考力・資料読解・探究力・考察力」を問う問題中心に作問されており、本校は昨年度より平均点を上げ、対応を見せている。２年後に試験科目として加わる「情報」にも注視している。	◎
		・文理進学コース３学期特別授業の実施	文理進学コース３学期特別授業の実施	例年、関関同立の一般入試と同時期に実施されていた卒業試験が特別授業になったことで、生徒の進路希望に沿った指導がしやすくなった。	○
		・文理スタディキャンプの実施	文理スタディキャンプ（BSC）の実施	今年度初めて行われ、学習に対する興味づけの機会として効果があったと思われる。	◎
		・文理進学コースの内発的動機づけへの取り組みの検討	文理シーキング・アクティビティ（BSA）の実施に向けて	内発的動機づけへの取り組みとして検討。生徒の個別的ニーズに応えつつ、総合型選抜にも対応できるような、生徒にとって魅力的なものとして発展されていくことが求められる。	○
		・多様な進路に対する指導体制構築 ・系列大学（大阪商業大学/神戸芸術工科大学）との連携強化	系列大学への進学について 系列大学（大阪商業大学/神戸芸術工科大学）との連携強化	大阪商業大学　124 名（26.4%） 昨年 27.5% 神戸芸術工科大学　6 名（1.2%） 昨年 0.7% 系列大学との連携では、好意的な大阪商業大学広報入試課の協力が大いに得られたことは大きかった。神戸芸術工科大学においては、進学者数は微増したものの、昨年度ほどきめ細やかなやり取りがなされなかったことは、今後改善に余地を残す。	○
			就職希望者について	求人者数も回復傾向にあり、就職希望者 10 名が全員内定をもらうことができ、きめ細やかな指導ができた。次年度から電子求人の活用が可能となり、今後もより適切な対応を心がけていく必要がある。	◎

中間的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自　己　評　価 ［◎-評価 80%以上　○-評価 60% △-評価 40%　×評価 20%以下］	
□入試・渉外構想	**[1] 広報活動の強化** (1) 全教員で募集活動を行うという意識を持つ。 (2) 東大阪、八尾、大阪市など地元を中心に、中学校への渉外活動を重点的に実施する。アスリート推薦での訪問を活かし、広範囲で本校を周知する活動を行う。 (3) 中学校への出前授業については、積極的に引き受ける。 (4) 学習塾への訪問回数を増加し、広報活動に努める。学習塾長対象説明会のみならず、塾を訪問しての説明会を提案する。 (5) 学校案内（パンフレット）作成にあたり、業者との連携をしっかりと取り、本校のアピールしたい内容をしっかりと伝えることのできるものをつくる。 (6) 本校でのオープンスクール、入試説明会を全教職員で取り組み、生徒の参加や協力も得ながら内容をさらに充実する。With コロナ禍での、説明会のノウハウを蓄積する。 (7) 行事やクラブ活動など本校の情報を積極的に発信し、ホームページの更新頻度を高めていく。 (8) 2022 年度入試より導入したネット出願について検証する。 **[2] 専願受験者の確保** (1) コースコンセプトを明確にし、コース目標を達成するための教育活動をアピールすることで専願志願者増を目指す。 (2) スポーツ専修コース 3 クラス 90 名以上の確保を目指し、スカウティングに注力する。スカウティングでは、他校と競合することも多く、その際に施設設備面の比較から他校を選択される場合も多い。5 クラブが共用しているグラウンド、他校で整備されている人工芝グラウンドやタータントラックなどの設備面、柔道場などの時間的制限などである。ここが将来的に安定して志願者を確保するための一つの大きな受け皿になると考えられるので、法人と協議しつつ、施設設備面での改善を進めていきたい。 (3) 充実した特待生制度について広報を強化するとともに、中学校へ丁寧に説明することで理解を得るようにする。 (4) 改修した芸術 I 教室、放課後デッサン指導や学習指導、また、アドバンテージである神戸芸術工科大学との連携を強く打ち出すことでデザイン美術コースへの専願志望者を増加させる。また、デッサン講習会へ参加し、優秀な結果を出した生徒の所属する中学校へ本校美術教員が訪問するなどの直接的なアプローチを行う。	・基盤とする東大阪市、八尾市、大阪市、柏原市、生駒市、奈良市の中学校から安定した入学生徒数を確保する。そのため入試対策委員会と企画広報部が連携し、効果アップを図る。オープンスクールや入試説明会は全教員で取り組む。 ・学習塾への広報活動強化 ・入試相談ウィーク	「オープンスクール」 「入試説明会」 「塾対象説明会」 その他各種説明会の参加人数からの検証	コロナ禍により、予約制を導入。 ＜オープンスクール＞ ・第 1 回（435 人）---完全予約制で実施 ・第 2 回（386 人）---完全予約制で実施 ※計 821 人(昨年 659 人) ＜入試説明会＞ 今年度は 3 回実施することができた。（1 回目 : 154 組　2 回目 : 158 組　3 回目 : 256 組）いずれも予約制で実施。 ＜塾対象説明会＞平成 30 年度より 2 回実施 78 塾（昨年 66 塾） 外部説明会に参加をしない方針の塾も多く、数値の減少は仕方ないものと考えられるが、さらに魅力的な情報の提供に努める必要がある。 ＜入試相談ウィーク＞ 今年度も通常の位置づけで行った。38 組（昨年 44 組）が参加した。組数は微減した。個別相談形式であるため、きめ細やかな説明ができる。そのため、本校の魅力をより伝えやすく、直接受験につながることも多く、さらに充実させ継続する必要がある。 ＜塾訪問＞ のべ訪問塾数は 1097 塾(昨年度は 258 塾　一昨年度 712 塾)と増えた。これは専従の担当者 1 名を配置できたことが大きい。地元の東大阪市･八尾市などを中心に訪塾した。重点塾には管理職が同行した。	○
		・ネット出願の導入	ネット出願について	昨年度から導入した WEB 出願システム“miraicompass”は、業務の負担が大幅に軽減され、大きなミスもなかったが、環境依存文字が入力できないなどシステム上の不都合が目立った。	◎
		・中学校への出前授業積極的受入れ	出前授業への対応	中学校への出前授業は 9 中学 17 講座。 （昨年 6 中学 18 講座）	○
		・ホームページを用いた迅速な情報発信	ホームページを用いた情報発信	企画広報部を中心に、学校行事やトピックなど可能な限りリアルタイムでホームページに掲載した。	◎
		・スポーツ専修コース 3 クラス編成	アスリート推薦スカウティングについて	アスリート推薦での受験　116 名（昨年度 99 名）今年度も 90 名前後を適正人数目標に渉外活動を行ったが、結果として 100 名を超える人数となった。	○
			令和 5 年度入学試験の受験数	出願数　1134 名（昨年　1066 名）　増 専願　365 名（昨年　328 名）　増 併願　769 名（昨年　738 名）　増 入学数　465 名（昨年　412 名）　増 受験人口の減少期だけが原因にはならない。年間通じての渉外活動を検証し、改善していくことが急務である。	◎

中間的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自　己　評　価 [◎-評価 80%以上　○-評価 60% △-評価 40%　×評価 20%以下]	
	[3] 女子生徒の確保 (1) 志願者の 40%、入学者の 33%を目標に取り組む。 (2) 2022 年度より変更する体育授業時のジャージや、サニタリーボックスを設置したトイレ、什器の入れ替えなどを行い明るい雰囲気となった食堂など、近年改善してきた点をアピールしていく。また、さらに女子生徒に魅力的な学校を目指して、明るいイメージの校舎・教室を目指して、改善に向けて努力していく。 (3) 女子生徒に魅力あるクラブの増設を考え実行する。運動部では、陸上競技部、柔道部、剣道部で募集活動を積極的に行う。また、これらのクラブについては、サポートできる女性スタッフを検討する。	・デザイン美術コースによる食堂の入口装飾	デザイン美術コースによる食堂の入口装飾	食堂の入口にデザイン美術コースの文化祭展示としての作品が描かれ、昨年度描かれた壁画とともに、食堂に明るい雰囲気を醸し出している。	◎

中間的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価 ［◎-評価 80%以上　○-評価 60% △-評価 40%　×評価 20%以下］	
□教員の研究・研修構想	**[1] 教員の教育力向上** (1) 2021 年度より実施している時間講師も含めて全教員が行う公開授業（研究授業）を継続実施する。見学した教員の事後アンケートを教科担当者にフィードバックすることで、授業内容・方法の向上を図る。 (2) 校内研修会を実施し、教員の教育力向上を図るとともに意識統一を行う。教務部主催の放課後ミニ研修会や常勤講師対象研修会は継続して実施する。 (3) 外部研究会への積極的な参加を促し、参加後に研修会や教科会で報告し、全体に情報が共有できるようにする。 (4) 学校評価や授業評価を実施し、授業分析や授業改善の指針とする。 (5) 教科会を充実し、教科内での意見交換や止揚の場、教科教育力向上の場として活用する。 **[2] 教員組織の活性化** (1) 職場の雰囲気は良く、教育目標を共通認識し、教員相互で助け合える組織となりつつあるので、さらに安心して働ける環境づくりを行う。会議等の進め方について研修を行う。 (2) 学校施策や行事を責任の所在を明確にした上で企画・運営していく体制づくりを行い、運営委員会、校務分掌会議、コース運営会議、学年会、教科会などが、機能的に働くようにする。また、目的に沿った総括を行い、ＰＤＣＡサイクルを意識する。 (3) 年間を通して常勤講師研修会、年度当初に講師説明会を実施し、全先生方で同じスタンスで指導し、問題点を共有できるようコミュニケーションを取ることを心がける。 **[3] 変革する教育への対応** (1) 大学入学共通テストについて分析を行い、該当教科、進路指導部を中心に対応を進める。また、英語外部検定試験の復活、教科「情報」等、情報収集に努め適切に迅速に対応できるような体制をつくる。 (2) ＩＣＴ教育について、タブレットの有効活用を中心に検討していく。 (3) 主体的・対話的で深い学び、英語の 4 技能など新しい教育の方法論について、外部研修会を中心に学び、教科教育として取り入れていく。 (4) クラブ活動の在り方について、学校方針（学校長方針）を検討し、提示する。 (5) 公立高校のクラス定員減少化検討という流れを受けて、経営的には負担となるが 35 名の学級定員について、法人へ相談しつつ検討する。	・公開授業の実施	授業公開の有効活用	各教科全員の教員が授業公開を行った。 見学する側も実施する側も刺激となり、授業の向上につながった。	○
		・校内研修（教務部・保健委員会）の実施	校内研修	教務部主催の全体研修会は観点別評価に伴う授業改善の内容で実施。ミニ勉強会を 6 回実施。主体的に学び、成績アップのための授業研究会は 11 名 15 回実施した。（昨年度 5 名 8 回）また保健委員会主催で CPR・AED の研修会は消防署に来校していただき実施できた。	◎
		・外部研修会への積極的参加	外部研修会への参加	日本私学教育研究所主催の研修会にのべ 6 名が参加した。現在の教育の課題や現状、他校の取り組みを知る良い機会となっている。	◎
		・高校企画室主催による先進事例視察会の実施	先進事例視察会	三校の教職員で広島県内の高校に視察に行った。先進的事例視察会ということで行われた他校の見学は、大変有意義なものとなった。	◎
		・授業アンケート等の活用	授業アンケートの実施	2 学期中に授業アンケートの実施、レポートの提出を義務付けた。ただし、形骸化してきている部分も否めないため、より効果的に実施する必要がある。	△
		・教科会の充実	教科会議を通じての教授力向上	新学習指導要領での観点別評価も含めて、評価の方法についても教科内で議論することが多くなっている。単なる連絡会ではなく、教科学習の充実を討議する場になってきている。	○
		・時間講師説明会の実施	時間講師対象の説明会実施	４月初旬に、全時間講師対象に学校方針の説明会を実施、理解を得た。	○
		・新学習指導要領に伴って導入された観点別評価の実施	新学習指導要領への対応	新学習指導要領に伴って導入された観点別評価の対応をした。本校独自に作成したエクセルシートはよいものが出来上がった。ただし評価方法は試行錯誤の状態であり、研究が必要である。	◎
		・大学入学共通テストの研究	大学入学共通テストの研究および対応	文理進学コースを中心に大学入学共通テストの研究と各教科での準備を進めた。受験数も年々増加しており、高得点を取る生徒も予想以上におり、進路面での成果をあげている。	◎
		・ICT 教育充実に向けての準備	ICT 教室の有効利用	情報の授業をはじめ、各教科、放課後授業、クラブ活動での動画チェックやオンラインミーティングなどで積極的に利用されている。	◎
		・クラブ指導の在り方についての検証	クラブ指導の在り方について	今年度より、スポーツ専修コース全学年「スポーツ演習」のコマをクラブ単位で実施した。今後数年継続していく中で、現行のクラブ活動の在り方と比較することができ、クラブ指導の在り方について検証できるものと思われる。	○

中間的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自　己　評　価 ［◎-評価 80%以上　○-評価 60% △-評価 40%　×評価 20%以下］	
□その他	**[1] 保護者との連携強化** (1) ＰＴＡ活動へ教員全体で参画・協力する。 (2) 家庭で学業成績や学校生活の様子を把握してもらうために、一学期および二学期の年 2 回クラスで三者面談を実施し、一学期および二学期中間考査後に結果を郵送などで報告する。また、保護者対象に公開授業を実施し、学校･授業の様子を見てもらう機会とする。 (3) さくら連絡網を家庭との連絡の手段として活用する。特に学校からの一方的な連絡に留まらず、欠席連絡やアンケート回収など保護者からの連絡ツールとしても有効利用する。 (4) 就学支援金及び授業料支援補助金と授業料との相殺により、家庭の負担軽減に努める。 **[2] 地域との連携** (1) コロナ禍が終息に向かうことを前提に、クラブを中心に東大阪市民ふれあいまつりなど地域行事へ参加・協力をする。また、文化祭など本校行事を近隣へ案内し、本校の様子を知っていただく一助とする。 (2) 第三者評価委員会を設けるに当たり、近隣自治会などへ協力依頼を行う。 **[3] 大阪商業大学附属幼稚園との連携** (1) 本校デザイン美術コースの協力授業を継続して行い、連携を図っていく。 (2) 運動会、避難訓練、夕涼み会など幼稚園行事へ協力する。	・中間試験結果の郵送 ・保護者対象授業公開 ・年２回の三者面談の実施 ・メール配信の有効利用 ・東大阪市民ふれあいまつりへの参加 ・近隣自治会への協力依頼 ・学校評価委員会の開催 ・大阪商業大学附属幼稚園との連携	中間試験結果の郵送	一学期・ニ学期の中間試験結果を各家庭に郵送、その他その時期毎の諸連絡も同封している。	◎
			保護者対象の授業公開について	11 月に期間を設けて行っているが、今年度もさくら連絡網を使って配信した。さくら連絡網で配信するようになってから見学者は増加した。	○
			年２回の三者面談の実施	一学期・ニ学期の年 2 回クラスで三者面談を実施することで、家庭で学業成績や学校生活の様子を把握してもらうことができた。	○
			メール配信の有効利用	年度当初に登録をお願いすることで、ほぼ全家庭に登録していただいた。 欠席連絡や長期休みの前後における確認事項や各種行事の連絡など大変有効に活用されている。(学校評価アンケートより：保護者肯定的意見 97%　昨年度 95%)	◎
			東大阪市民ふれあいまつりへの参加	今年度は東大阪市民ふれあい祭りが実施され、デザイン美術コースがちんどん体験を行い、また吹奏楽部も出演した。	◎
			近隣自治会への協力依頼	学校評価委員会を開催することはできなかったが、近隣自治会（御厨南自治会）に「令和 4 年度学校評価まとめ」に対して書面でご意見を頂戴し、本紙に反映することができた。	◎
			学校評価委員会	（新型コロナウィルス感染防止のために集合形式での開催はできなかったが、書面で回覧、意見を集約した。）	---
			大阪商業大学附属幼稚園との連携	デザイン美術コース 2 年生の幼稚園との『協力授業』については、新型コロナウイルス感染症の影響により、コロナ禍以前の様には実施できなかった。動画で実施した。 また幼稚園での屋外行事（運動会、夕涼み会など）における本校グラウンドの使用にあたり、体育科およびグラウンド使用各クラブが調整、協力を行った。幼稚園イベントに吹奏楽部が出演した。	◎